

た。営舎内にいた隊員約三百人による部隊編成が始まったのは、地震発生四分後の一月十七日午前五時五十分である。

本部二階の情報所。六時三十五分、警伊丹署から第三師団当直を介して「阪急伊丹駅が倒壊、生き埋めあり」との救助要請が入った。「見に行け」。連隊長の

三條三項によつて部隊長の判断で隊員を「近傍派遣」出来る。

間もなく、「警官二人生き埋め、一人は生存」との無線が飛び込んできた。すでに約五百五十人が待機中だ。黒川は最初部隊派遣を決断した。副連隊長長安部勝馬(五三)を指揮官に、第一中隊長小川清史(四六)ら第一中隊四十八人に出動命令を下す。七時三十五分、隊員が高軌動車を下し、ジョブ型車で出発した。

情報所向かいの連隊長室では、黒川が思い悩んでいた。どこの自治体からも連絡がない。ラジオが断片的な情報を伝えるだけ。命令を出すのが、派遣場所は「点」に限られる。場当たり的な部隊投入は避けたいというのが、黒川の考えだ。効果的な部隊運用には「面」情報が不可欠である。なのに情報は来ない。「行かなければならない現場は、どこなんだ」。イスに一・七六メートル、八十キロの体を沈めた。

西宮市に向かった偵察員から叫ぶような無線が入った。「武庫川以西は甚大な被害」。近傍派遣のエリアは明確ではない。自衛隊法によって、近傍以外は知事などによる派遣要請が原則だ。西宮市は遠過ぎる気もした。しかし、間に合わない時

法は要請なしの派遣も認めている。「被害者の判明場所から手をつけるしかない」。黒川は決断した。第三師団長の浅井輝久（英）に電話許可を求めた。「行かせます」。八時二十分、重迫撃砲中隊六十人がシープ型車に削岩機やチェーンソーを積載、西宮市へ出発した。

直後、黒川はし〇（連絡幹部）を呼んだ。「市役所で情報をとれ。西宮と芦屋、大阪へ行け」。大阪府内も心配だった。連隊の六個中隊のうち四個中隊が北大阪を担当する。なにに伝わるのは神戸方面の被害ばかり。

突然、NHKテレビが「宝塚市立病院が倒壊、けが人多数」と伝えた。伊丹駅から帰ったばかりの小川の第一中隊が出動。だが、倒壊の事実はなかった。

動いていたのは、地上だけではない。空では近傍派遣以外に「訓練」名目で、自衛隊の偵察ヘリコプターが出動した。

七時十四分、八尾空港を陸自中部方面隊のジェット偵察ヘリ「OH-16」が飛び、目指すのは、震源地。地震出動の第一番機だ。十六分後、第三師団飛行隊ヘリが二番機として離陸した。

一番機の機長木崎徹（四三）から報告。「須磨東、火災多数」。二番機の機長岡山昇（四二）は西宮市の阪神高速神戸線上空で、ビニールシートを発見。「ケガ人」とある。被災地の人々は自分が出る方法で、救助を求めている。

自衛隊は、災害の中心地に向けてすこしずつ近づいていた。だが、その動きは緩慢だった。



イカヅチノオオカミをまつる。御影山のふもとに
元禄元年（1688）に創建。石屋の天神さんとして
親しまれる（神戸市東灘区、1月24日撮影）

入試合格祈願（隨時可）

初天神

網敷天満神社